巻頭言

ふるさとの庶民史

――私どもの先祖の生きた姿――

佐伯史談会副会長　羽柴　弘

ふるさととは、いうまでもないがわが生まれ、育ったところである。だからそこに、「うさぎ追いしかの山」があり、「小ぶな釣りし」小川が、今も昔のままの姿で残っていてほしいと思う。

その村で私たちは幼少の日を遊びくらし、成長して小学校に学んで多くの友を得た。しかし、すでに父母や、大半の学友や、優しい言葉をかけてくれていた古老たちは、もう殆んどこの世の人でない。それもそのはず、こちらが八十歳が近くなっているからである。

だれも父母は二人であるが、祖父母は四人、曽祖父母は八人と、一世代毎に先祖の数は倍増しにふえる。今かりに十世代さかのぼると、その数は千人を越えるが、一世代を二〇年と計算して、約二〇〇年の昔になる。時は江戸時代中期、安永・天明の頃で、当時は天候不良、天災や悪疫がしきりに相つぎ、蝗害になやまされ、全国的に飢饉がうち続いた時代であった。

わが先祖たち、村中の人々ことごとくは、すき腹をかかえながら山菜やくずの根を求めて、山野をさまよっていた。わが直系の祖先だけでも千人余、これに親類を加えると何千人となる。その村人たちが毎日どうしてくらしていたかとなると、そこに二〇〇年前のわがふるさとが、現実の姿となって浮かびあがってくる。

当時の村の庶民、とくに百姓たちは、どんな暮らしをしていたか。年貢や運上でさいなまれていたことは、皆さんすでにご存知の通りで、わらで髪をむすび、縄の帯をしめた腰にはかまを差し、くわをかついで仕事に出かける。女たちは乳児を背に負い、裸に近い幼童の手をひいて夫の後を追う。食も住も貧しい限りであった。

しかし村の人々はよく働き、老人や病弱なものをいたわり、ふるさとの村づくりに精出した。石垣をきずいて村の道を作り、大きな石を運んで谷川に飛び石を連ね、傾斜の急な山道はつるはしを振るって岩を掘り、段々道や曲がり道をつける。それはふるさとの交通・運搬の原点であった。

家を建てること、何年かたつとする茅屋根のふきかえ、どちらも多年の経験で得た技術が物を言う。新たに田を掘ったり、焼畑農業をすることも、村の長老たちが、ちゃんとした指導をする。即ち生活文化の伝習である。

人々は素朴な生活の中に、農耕や牧畜の経験を慎重に積みかさね、それを惜しみなく村の人々に教えた。冬枯れの農閑期に入ると、男たちは狩猟に熱中した。これには数々のルールがあり、共々にそれに従った。女たちは味噌や醤油の醸造から、それが夏には麦甘酒というユニークな飲みものまでに進展する。四時折々の漬物に至るまで、台所を預かる女達は真剣に老女に学んだ。

このような村のくらしの中に、神仏をあがめて鎮守の社を営み、地蔵尊をまつり、それらの祭礼の賑わいを育てることも怠らなかった。神楽や杖踊を奉納したり、相撲が賑わいをさらに盛り上げた。また四時折々、庚申待や地蔵祭があり、短かい夏の夜でも盆踊りに熱中した。すべて村里の生活に密着した村の歴史の中で、ずっと何百年も守り続けて今に伝えられている。

何とすばらしいことではないか。大友・島津が日向でどんないくさをしようと、豊臣・徳川が関が原や九州で天下を争おうと、ほとんど関係なしにふるさとの歴史は連綿と続いている。その歴史の中に生きて働いたのが、私どもの先祖であることを思いたい。

とくにここで指摘したいことは、中世は戦国争乱に明け暮れし、近世藩政は全く幕藩体制にあぐらをかき、庶民の生活や文化は無視されつづけた。具体例で補足すると、藩の督励で出来た小田井堰や常磐井路などは、耕地の開発による年貢の増徴がねらいであった。また紙すきの奨励にしても、楮皮生産までは農山村の百姓に仰せ付け、藩がひと手に集めておいて、農閑期に農村に戻して紙にすかせる。製品は城下町に紙座を設けて引取り、これを特産品「佐伯和紙」として専売、大いに利潤をあげて藩庫をうるおした。百姓の手許には一方的に決められた楮皮の売上げと、楮がらだけであった。私どものふるさとには、このような先祖たちの生活の歴史があったことを、おろそかに考えてはならないと思う。